

耕土耕心

第27号

令和2年
1月15日

編集・発行

静岡県立農林大学校
同窓会

〒438-8577

磐田市富丘678の1

電話

0538-36-1564

「伝統と飛躍」

同窓会長 岩倉和之介



新しい元号の幕開けとともに、農林大学校の歴史も百二十周年を迎えようとしております。明治三十三年農事試験場の設立と併せて発足した歴史は、先輩諸兄の御尽力をはじめ同窓生の活躍により、一次産業の礎を築く基となってきました。

この間、組織上も時代に即して幾多の変遷を経ながら今日の大学校へと改変され、この四月からは文部科学省所管の専門職大学への移行が決定されました。

同窓会としては農林水産省から所管換えされることで、これまでの伝統と一次産業を担う実践的な教育機能が頓挫するのではないかと懸念しました。しかし、県は農林業の人づくりの方向を踏まえて、①創設の趣旨を農林業の人材養成に置く、②教育の目標とされる理念を耕土耕心として引き継ぐ、③加えて実学重視の観点から農林業経営体等での実務実習を教科の柱とするなどとしており、同窓会との絆は一層深まるものと受け止めております。

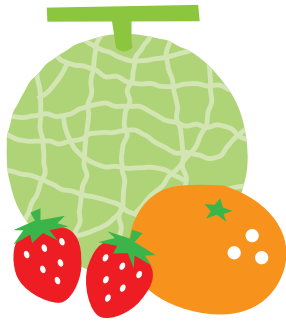
さて、国が農林業の動向を示す「年次報告（白書）」に目を向けますと、トピックスとして農林水産物の輸出額が六年間連続で過去最高額を更新し一兆円の規模に達すると掲載されています。

本県の農業分野においても、従来からの茶、柑橘に加えメロン、イチゴ、わさび、肉牛などの業界が東南アジア、米国、中東などを見据えて意欲的な取組を見せています。また、林業分野においても

全国規模の木材輸出が中国市場を中心に三百五十億円を超えるなど拡大の方向にあります。

今後、自由貿易の進展をはじめアジア諸国の経済成長と世界的な人口増加が食市場を急成長させることを予測すると、これからの農林業はマーケットの視野を海外に向けていくことが一層重要視されてきます。

同窓会としても、こうした動向を踏まえ新制大学のカリキュラムに呼応しつつ、学生の国際感覚の修得に向けた支援活動を引き続き展開してまいりたいと思います。



「農大の変化の中で」

農林大学校長 滝田和明



九千六百人と三千八百人。前者は農事試験場での技術者養成開始以来の、後者は現在の磐田の地に昭和五十五年、農林短期大学校が設立されて以来の卒業（修了）者数になります。これらすべての者が就農したわけではありませんが、本校が農林業の担い手育成に取り組んできた実績と重みの表れだと思えます。

時代の変遷に伴い学生の様様は大きく変化しました。かつては学年に数人だった女性は三分の一となり（女子寮が足りず毎年頭を悩ませます）、一割以下だった非農家出身者は三分の二になっています。農林業の担い手だけでなく人口も減少する中では、この傾向が続くでしょう。これに対して、一時は二割を下回った就農率は、近年、雇用就農の拡大により四割ほどと

なっています。三十人を超える養成課程の学生を雇用就農で受け入れてもらっている農大は、全国でも本校のほか愛知と鹿児島しかありません。これもひとえに同窓生の皆様を中心とした農業法人等の御活躍の賜物であり、感謝に耐えません。

時代の流れは学生だけでなく、学校そのもののあり方や学習内容も大きく変えてきました。試験場での科目別研修を短期大学校に統合し、更に林業も統合して現在の姿に至っています。四月からは日本で最初の農林業分野の専門職大学である「県立農林環境専門職大学」として、理論と実践を備えたプロフェッショナルたる即戦力の人材養成に取り組みます。

一方で本校の特色であり、四十年以上も続く優良経営体での長期研修は、実践力を身に付ける優れた機会として専門職大学にも引き継がれます。受入経営体の御協力をなくして本校の歴史を語ることはできません。これまでの同窓生の皆様の御協力に感謝するとともに、一層の御理解と御支援をお願いいたします。

《特集》 「新しい大学に 生まれ変わります」

専門職大学学長(予定者)
鈴木滋彦



時下、ますます御清祥のこととお喜び申し上げます。昨年九月に静岡県立農林環境専門職大学・同短期大学の設置が文部科学大臣から許可され、全国初の農林業分野の専門職大学が本年四月に開学する運びとなりました。長きにわたり本学の歴史を支えてくださった皆様、設置の申請に御協力いただいた皆様に心からお礼申し上げます。

本年令和二年(二〇二〇年)は、明治三十三年(一九〇〇年)に県立農事試験場の見習生制度が開始されてから、ちょうど百二十年目に当たります。農林大学校はその前身から数えて、還暦を二回重ね「大還暦」を迎えることになりました。このような節目の年に新しい制度

が動き始めることに、歓びと同時にその重みを強く感じております。これまでの農林大学校の伝統と「耕土耕心」の精神を引き継ぎながら、時代の要請に応える新しい大学創りを進めていきたいと考えております。

専門職大学になって変わることは、大きく二点あります。一点目は教育体制です。大学と短期大学の二つの大学が新設され、卒業生にはそれぞれ大学卒、短期大学卒の学位が授与されます。これまでの農林大学校では、養成部で学び研究部に進む「二階建て」の教育体制でした。新たな制度では、経営の大規模化や多角化などに対応するために、四年間の体系的な教育プログラムを通じて農林業経営のプロフェッショナルを養成する四年制と、生産現場のプロフェッショナルを養成する二年制の「二本立て」の教育体制としました。磐田の地に、県立大学が二つ新設されたこととなります。

二点目は、養成する人材像です。農林大学校では「即戦力」となるための知識や技術の習得に重点が置かれていましたが、これからの担い手には「変化への対応力」が求められます。近年は、ICTやロボットなどの先端技術の急速な進展や、農産物マーケットのグローバル化、消費者志向の多様化など、農林業を取り巻く環境変化が大き

くなってきました。新大学では、理論に裏付けられた「高度な実践力」と、専門分野を超えた学習による「豊かな創造力」を備え、経営の中核を担う人物、農林業現場のリーダーとなる人物を養成したいと考えています。

専門職大学の制度は昨年(二〇一九年)から始まった生まれ変わったの制度であり、更に農林業系では全国初となる試みです。同窓会の皆様をはじめ、関係する皆様の御指導、御支援を賜りますようお願い申し上げます。

《学校の話》 「農林大学校の 海外派遣研修の歩み」

教務課養成班長 栗山和直

校舎に専門職大学への移行に向けた改修工事の音が響き、台風の進路が気になるそんな時期、今年度の海外派遣研修は行われました。

世界二位の農産物輸出国で先進的な施設園芸が注目されるオランダと、経済成長が著しいアジア圏で日本との関わりの深い台湾。ここ数年は、この二か国への派遣を行っています。今年度は、オランダ研修(九月二十一日～三十日)に二十七名、台湾研修(九月二十四日～十月一日)に十一名の学生が参加しました。

我が校の国際交流が本格化した

のは、平成十六年の浜名湖花博を契機に、オランダ・ウエラントカレッジと教育提携姉妹校協定を結んでからです。平成十八年からは、研究課程の学生を主体にアジアへの派遣研修も始まりました。

オランダでの研修は、毎年十名前後の参加でしたが、ウエラントカレッジ学生宅でのホームステイも経験でき、その学生たちが当校を訪問するなど深い交流が行われました。参加人数の増加やウエラント校の訪日研修が中止になったのに伴い、視察を主体とした派遣研修へと形は変わりましたが、大規模で効率化した農業経営体や先進的な技術開発を行う関連企業を数多く、間近で見ることができるようになりました。

また、今年度は、ウエラントカレッジの学生二名が、県内企業でのインターンシップを行い、当校との交流の新たな機会もできました。

同窓会の皆様や保護者の皆様の御支援を受け、海外派遣研修には、今まで多くの学生が参加しました。オランダへは二百六十四名の学生が、そしてアジア（タイ、韓国、台湾など）へは百三十五名の学生が訪問しています。

学生の多くが、日本の農業との違いや、海外の歴史・文化・景観、それぞれの国の人々との交流などに面白みを感じ、中には卒業後、

海外農業研修に参加する学生もいます。

農林大学校としての海外派遣研修は、本年度をもって最後となりますが、新たな専門職大学でも、カリキュラムに組み込まれ、学生に海外の農業・文化に触れる機会が提供される予定です。

「森を守る林業を暮らして活かす」



静岡県指導林家 安池勳司
【平七農林短卒】

初めて植林したのが平成七年。あれから二十四年も経ったのかと驚くばかりです。私が今あるのは、当時の静岡県立農林短期大学校で林家留学を経験し、天竜の金指氏と春野町の松下氏から学んだことがとても大きかったです。金指氏からは、林業は経営面積ではなく、自ら描き実践することだと強く指導を受けました。松下氏からは、先ず境界を覚えるためには、数年ごとに自ら歩くこ

と。林業家は常に自分たちが暮らす地域のことを考えて、自ら決断し積極的に参加しなさいと優しく教えていただきました。

私は現在、地域の林業士の仲間数名と、製材・加工流通・家具デザインという方々と連携し、『しずおか都市の木化構想推進プロジェクト委員会』を立ち上げて活動しております。私たちが生産管理をしている地域の木材やフィールドを通して、快適でゆったりとした空間デザインを積極的に暮らしの中に提案していこうというものです。

もちろん、私自身は木材生産や環境整備事業といった本来の現場の仕事がベースですが、様々な分野の方々と関連することで、林業として様々な企画に参加できる可能性が広がったように思います。

林業＝木を伐るだけ、ではないことを、最前線にいる私たちが明確に示していかなければならないと感じております。森を守るといふことは、林業という仕事を通して、そこに住む動植物の生活圏や地域を守るといふこと。生産された木材を有効に暮らしの中に活かしていくということ。利用者の立場に立って森林や木材の価値を考えること。若い世代の人たちが希望を持って活躍できる仕組みを林業の中にも確立していくことが、何よりも大切だと考えて、今後も活動を続けてまいります。

《支部だより》 「雑感」

中遠支部長 伊藤富次夫

【昭四十五講習所卒】

私は、昭和四十五年度講習所最後の卒業生であります。同窓生は二十三名で静岡市北安東の地で勉学に励んだこともありました。

卒業後、農業の盛んな袋井市に奉職し、平成二十三年に退職、現在は、菜園作りに勤しんでいます。

また、平成二十五年から地域の誘いもあり、磐田市自治会連合会豊浜地区役員を仰せつかり、活動に参加させていただいています。自治会活動も、多岐にわたっており、安全で安心な住みよい地域づくりを目指し、地区内の四自治会の連絡調整から防犯、交通安全、防災、福祉など様々な活動を行っています。しかし、地域を取り巻く現状は、昔とは大きく変わってきております。①生活様式や価値観の変化、②少子高齢化や核家族化、③自治会等の役員への業務負担の増、④市職員や予算の削減などが挙げられ、このままでは地区の将来がとても不安な状況となっております。このため、自治会の枠を超えて地域住民や各種団体が連携して取り組む活動が、今後更に必要な時代

になってきています。

当地区も、磐田市の指導を受け、平成二十九年度に「豊浜地域づくり協議会」を立ち上げ、自治会組織を中心に新たな地区活動を始めています。この協議会活動も三年目となり、順調に歩み出したことから、まずは安心致すとともに、他地区の模範となる組織を目指していきたいと思っています。

今年も、古希を迎える年となります。これもひとえに、地区皆様のお陰と感謝しつつ、もうひと踏ん張り頑張っていきたいと思っています。

「担い手育成は永遠のテーマ」

西部支部長 村上隆啓

【昭四十五講習所卒】

私は浜名湖北部の細江で、小規模ながら、みかん作りをしています。六十歳から本格的に始め、生涯現役・老夫婦が生甲斐を感じる柑橘経営を目指し、就農しました。

量より質を基本に、作業効率を最優先した木づくり・園づくりから取り組みました。段々畑や急傾斜園地以外のみかん園全てで改植しました。短期間で改植できたのは、友人・知人等多くの人の助けが計画的にできた要因です。

今年が就農十年目、収穫量が少しずつ増え、目標とした美味しいみかんが数年前から生産可能となりました。長年努力してきた成果が見え始めてきました。

しかし、私の所属するJAみかん部会は、柑橘主体の専業農家が少なく、他作目との複合経営農家等、多様な農家で構成されています。部会員の高齢化は、生産量や販売額の維持が難しく、十年後の産地の姿が見えない状況です。

行政機関は、JA・部会が策定した「担い手の育つ産地づくり」を長年にわたり支援してきました。産地の主要課題は解決されず、産地を取り巻く環境は年々厳しくなるばかりです。

産地の窮地を救うのは部会員自身です。担い手の育つ環境づくりを仲間と共に行動することが大切だと考えます。

次世代を担う人材は、生産組織・農業法人等の維持発展には不可欠です。経営形態によって求める能力は異なりますが、優秀な人材育成は永遠のテーマです。



《若手会員紹介》

「がんばっています」

株式会社カクト・□□

成島紘大・大棟圭・鈴木莉瀬

【平三十・二十九農林大卒】

農林大学校を卒業してから二度目の冬が来ました。今年度入社した成島君が一生懸命頑張っている姿を見ると、自分たちも身が引き締まる思いになります。

入社後、新入社員が覚えることは山のようにあります。業務内容はもちろん、農場では、多肉植物だけでも五百種以上あり、品種の名前を覚えることから始まります。また、それぞれの管理方法も異なるので、属の性質を理解してようやく一通り。ここまでは一苦労のところ、品種ごとの水掛けや防除などをこなしていきます。多品種あるだけでなく、天候や季節、その年によって生育が違ったりするので、記録してデータとして残すことが大切です。基本中の基本のことですが、

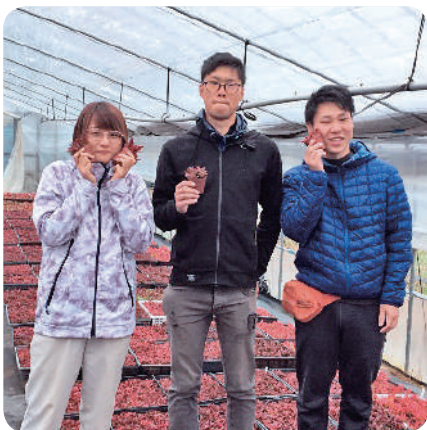
大学校で嫌々学んできた座学を真面目に取り組むべきだと、今更ながらに痛感しています。

多肉植物の管理だけでなく、直営店で店頭に立つこともあります。直営店には、老若男女、年齢を問わず、遠方からも様々なお客様が来店します。お客様には商品や家

にある植物の管理について、色々な質問をされるので、商品をよく理解しておく必要があります。また、直営店での接客は、お客様の声を直接聞くことができるので、生産の現場に立っている私たちにとって、とても良い刺激になります。

このように、私たちの職場は、植物の生産から販売、消費者の意見を直に取り入れられるような環境にあります。このような境遇を大切に、日々進歩しながら仕事をこなしています。

私たちは、大学校で多肉植物のことをメインに学んではいりませんでした。日々の水掛け、消毒、体力を付けることができたと思います。



△事務局からお願い▽

住所変更、訃報等は、各支部長又は支部役員まで連絡をお願いします。